

審査の結果の要旨

氏名 清水 睦美

2003年9月現在、「ニューカマー」と呼ばれる外国人児童・生徒のおよそ1万9千人が日本の学校に就学している。これらニューカマーの子どもたちの日常生活は、どのように構成され、そこにはどのような問題が孕まれているか。そうした問題に、日本の学校はどのように対応しているのか。そこには、日本の学校のどのような特徴が埋め込まれているのか。ニューカマーの教育や生活をめぐるさまざまな問題は、この10年ほどの間に急速に顕在化するようになったものの、教育研究においてはいまだ十分な実証分析に基づく学問的検討が行われていない。

そうしたなかで、本論文は、フィールドワークの手法を用い、7年間にわたりある学校と地域に密接に関与しながら、ニューカマーの子どもたちをめぐる諸問題（学校への不適應やいじめ、不登校、家族からの離脱など）を、学校と家族の〈間〉に焦点づけ、実証的・理論的に明らかにしたものである。

本論文は、2部構成をとる。第1部（5章構成）では、問題設定のあと、フィールドワーク調査によって得られたニューカマーの子どもたちの学校での日常、家族の過去及び学校や教育への関わり方、地域との関わりについて、丹念なエスノグラフィーを積み上げていく。そこでは、日本の学校文化が生徒たちを「特別扱いしない」という平等観をベースにできていることから、エスニシティに基づく差異が目立たなくされ、結果的にニューカマーの子どもたちを周辺へと追いやってく様が克明に記述・分析される。そして、その背後にある日本の学校文化の特徴と、家族の過去と教育戦略の影響を明らかにしつつ、学校と家族との関わりの中で、彼らの日常生活を意味づける文脈生成の仕組みを明らかにする。

続く第2部（3つの章と総括）では、第1部の分析を踏まえ、著者自身がフィールドに直接的に関わり合いをもつことで明らかとなる学校臨床学的アプローチによる分析が行われる。そこでは、学校文化の変革の可能性とその変化のメカニズムの解明、地域社会を基盤にニューカマーの子ども達自身が運営する自治組織による問題解決の特徴とその変化の解明を通じて、彼らの日常を意味づける文脈がどのように変化していくのかが分析される。そして、これらの分析を踏まえ、結論にあたる「総括」の章では、ニューカマーの子どもをめぐる問題構成のあり方を理論的に再構成しつつ、問題を固定的にとらえてしまいがちな本質主義に陥らずに、戦略的本質主義の視点から、問題理解を行うための新たな理論的視座が提示される。

以上のように、本論文はフィールドワークを通じて、ニューカマーの子どもをめぐる問題の諸相とそうした問題の変容のメカニズムを実証的、理論的に解明し、問題理解の仕方になら新たな視点を付け加えた点で、今後の教育研究に貢献するものと考えられる。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。